

紀要『事務研修』を発行し続けて

松井 寿貢

まつい・としつぐ
広島修道大学事務局長

創刊の経緯

『事務研修』は一九七〇（昭和四十五）年三月に創刊された。その経緯については私が説明するよりも、当時の事務局長の創刊のことばと、編集委員による編集後記の要旨等をお示しした方がご理解いただきやすいのでそれを紹介させていただく。

創刊のことば

「わが広島商大^(注)は、本年で開学十周年あります。一昨年約十二万坪の校地を入手して、新しい学園構想が着々と結実しつつあることは衆知のとおりであります。このようなわが商大の第二期の発展途上にあつて、予ねて事務職員の中から強い要望のあつた研修の成果をと

りまとめ、ここにこれを発刊する運びに至つたことは誠に意義深く、ご同慶の念を禁じ得ません。

大学問題が今日ほど論議されているときはありません。このような中にあつても、事務職員は組織の一員たる本旨に鑑み、よく本学のバックボーンたるべく研鑽に努めるべきことはいうまでもないと思います。

今回のこのような発刊は、大学としては余り例がないのではないかと思います。貴重な意義を持ち、また同時に責任の重大さを痛感します。職員が今後とも自他の研修活動を通じ、そして、大方のご指導とご叱正のもとに本誌の内容的発展をはかり、ひろく全職員の事務能力の啓発と資質の向上に役立てられることを心から念願してやみません」

(注)創刊当時の大学名は広島商科大学であつたが、一九七三（昭和四十八）年に人文学部増設を機に、学校法人修道学園の母体である広島浅野藩校の伝統と建学の精神を受け継ぐべく現在の広島修道大学と校名変更をした。

編集後記

「昨秋来、職員の中より起こつた、事務研修にかかわる報告・論文をまとめて冊子とした
い旨の意図は、本誌の〈目的〉に明示してあるとおりだ。
それは本学事務職員のそれぞれの仕事に傾ける情熱と姿勢

の証左として高く評価したい。繁忙を極める日々の業務の傍、書きあげた事務研修の貴重な遺産でもある。時恰も、本学創立十周年に当たる。R.M.Rilkeのいう“Metamorphose”の機でもあるろう。われわれにとって、“Philosophie”が大事なのではない。“Philosophieren”することが肝要なのだ。」

発行の目的

『事務研修』発行の目的は次のとおりである。

本学事務職員並びに関係教員が、主として事務研修にかかわる報告・論文を、その年次ごとにとりまとめて逐刊し、事務研修の成果を自ら確かめると同時に、ひろく全職員の事務能力の啓発と資質の向上を意図するものである。

休刊

現在は二十四号が発行されているが残念ながら三月に第三号を発行以来、キャンペーン総合移転、学部増設などにより四年間休刊されて現在に至っている。今から思えば残念な思いも少しはあるが、当時の状況を知る一人としては休刊も已むを得なかったと思う。むしろ無理をして発行していたら、今の継続発行はなかったかもしれない。

内容について

掲載内容

内容は主として事務研修に関する一切の報告・論文を掲載することになっている。その他資料、雑報、研修日誌等も掲載可である。

論文といえるかどうかは議論の分かれるところはあるろう。私たち大学職員は研究者ではなく実務家なのだから。しかし、レポートであれ自分の考えをまとめ表現し、批判をいただくのも勉強である。

学内外の研修に参加したなら、原則的にはこの『事務研修』に報告することになっている。したがって、結果として出張報告が多くなっている。

つまり研修に関することなら原則的には何でもよい。但し、一つだけチェック機能がある。所属の課長を通じて編集委員に提出することになっている。大学の貴重な経費を使って発行するのであるから、一定の内容チェックはあつて然るべきであろう。何でも自由というわけでもない。しかし、創刊以来これまで物議を醸したのものもなくはなかった。多少の批判精神も組織の体力強化には必要ではなからうか。健全な批判であるなら読者の評価がそれを許容するであろう。結局、『事務研修』という場を良くするも悪くするも職員次第という“自己責任”に他ならない。

内容の変遷

創刊のことに「大学問題が今日ほど論議されているときはありません」とある。当時から大学に投げかけられた課題は当然のことながらあったのだ。事務処理体制の整備、大学紛争、大学院・学部の設置等々その時の課題のことであろう。

『事務研修』の内容にもその時代その時代の課題が反映されている。昨今では「大学改革」、「設置基準の大綱化」、「情報化」、「国際化」、「学習支援」、「学生支援」関係の内容あるいは語彙が多くなっている。

創刊当初から継続的に掲載があるテーマが、「事務処理のコンピュータ化」である。発行当時は「事務の機械化」と言われていた。現在ではそのような表現はまず使われないが、コンピュータとはそれほどわれわれ大学職員の仕事に影響がある存在なのである。

内容の特徴

『事務研修』の特長に図書館や研究所から学という組織の特徴からくるものであるか。図書館界では以前から各種の研究集会も多くあり、継続的に研鑽が必要であるということだろう。創刊以来の投稿部局別のページの占める割合において、図書館・研究所はおおよそ半分を占めている。

今一つの特徴は教員も投稿可能であるということである。現在までに六名の教員が寄稿している。数は少ないが、このことは職員と教員のパートナーシップを考えることで意味があるものと思っている。

編集委員

この『事務研修』が継続発行できた理由の一つに編集委員会の存在がある。

当初、『事務研修』は職員会によって選出された各局局から成る事務研修編集委員会によって編集・刊行されていた。しかし現在では『事務研修』の刊行は人事課の分掌として位置づけられているが、編集については各局局に編集委員の選出を依頼し、選出された六名ないし七名の職員が編集委員会を構成し、編集を行っている。編集に関することはこの委員会に一任されている。

編集委員は、より読みやすく内容的にもよいものを工夫したいと当初は思うが、原稿集めと締め切りに追われている現実もあるようだ。

『事務研修』と「大学職員」

創刊号の編集後記を読み返してみても、先輩職員の格調高い文体に触れ、その識見の高さに改めて敬意を表すとともに、私自身は自らを省みて忸怩たる思いを禁じ得ない。

その編集後記にある、「仕事に傾ける情熱と姿勢」、「職員が変わる時機」、「論理的に考える」、「本質を考える」などということは二十八年経過した今も全く色褪せていない。むしろこれからの大学職員に益々求められるものだと思う。

さて、大学冬の時代といわれる如く大学経営が容易でなくなる状況の下で、往々にして私たちは大学職員として、今が或いはこれからがとて厳しく辛い時期と思いがちである。それも事実には違いない。しかし、大学設立以来、その時代その時代の課題があり、退職された先輩職員を含む本学の職員も大学構成員の一員として精一杯汗をかき、悩み、努力し、問題解決にあたり、これまでの本学発展の一端を担ってきたのも事実である。『事務研修』は大学職員からみた本学の歴史の一面も伝えている。

とはいえ右肩上がりの時代は過ぎ去った。一九九八年度の入試状況で危機感を増幅されている大学関係者は少なくないであろう。昨今の銀行・証券業界の状況は、高等教育機関の近い将来を予測させるに十分である。大学が変革せざるを得ないように大学職員も変革していくであろう。その変革の軌跡として本学の『事務研修』は、これからも存続していきたい。